

計結果を示した。

1. 逆転層の出現回数は上層(800 mb~700 mb)では、はっきりした季節変化を示し、12月下旬から1月上旬に極大に達した。東支那海南部では、2月頃に第2の極大が現れる。一方下層(800 mb~900 mb)の逆転層の出現回数は10月から翌年4月まで、ほとんど季節変化は認められなかった。

2. 逆転層の強さは10月から3月までは、上層でおおよそ $1.0^{\circ}\text{C}\sim 1.8^{\circ}\text{C}/100\text{ m}$ 、下層でも $1.0^{\circ}\text{C}\sim 2.0^{\circ}\text{C}/100\text{ m}$ ではほぼ同じであるが、下層の方が変化の振幅が大きい。

3. 対流混合層の高さを示す逆転層の下面高度は、対象領域の比較的北部では12月上旬に最も高いが、南部では充分寒気が侵入しないため混合層は未発達である。そして12月下旬になってはじめて比較的南部にある那覇、石垣島で下面高度が最高に達する。

4. 顕熱補給量と対流混合層の高さの関係は10月から12月の間を除くと、那覇、石垣島とも両者はほぼ比例して変化しており、対流混合層の高さを決める要因の1つは海面からの顕熱の補給であることを裏付けた。

5. 一方上層逆転層上面の高さは、高気圧の張り出しに伴う、下降流によって支配されていると考えられる

が、資料不足ではあるが、名瀬では両者の間には-0.512の統計的に有意な逆相関が認められた。すなわち、高気圧性沈降気流によって逆転層上面は押し下げられていることが認められた。しかし那覇、石垣島では、解析期間中ほとんど上昇流であったため、両者の間の相関は認められなかった。今後多くの資料について検討する必要がある。なお、極前線面の場合はこのように強い逆転は少なく、高度もより高いと考えられるが、上層の逆転層の統計の中にこれが若干含まれていることも考えられる。この点についても、今後検討を要する問題である。

### 謝 辞

親切な討論および貴重な御意見を寄せられた気象研究所、予報研究部の同僚に厚く感謝します。

### 文 献

- 斉藤直輔, 1978: AMTEX 領域の総観現象とその解析, 気象庁技術報告第93号, 9-40頁。  
 Fujita, T. and Honda, N, 1975: The Structure of lower atmosphere in AMTEX area, Report of the fourth AMTEX study conference, 113-116.  
 藤田敏夫, 1978: 総観場における大気境界層, 気象庁技術報告 第93号, 52-56.

## 日本気象学会および関連学会行事予定

行 事 名	開 催 年 月 日	主 催 団 体 等	場 所
昭和61年度日本気象学会 春季大会	昭和61年5月21日~23日	日本気象学会	気象庁
月例会「第30回山の気象 シンポジウム」	昭和61年6月21日		気象庁
第23回理工学における同 位体元素研究発表会	昭和61年7月1日~3日	共同主催	国立教育会館
短期・中期数値予報の国 際シンポジウム	昭和61年8月4日~8日	WMO(気象庁)・IUGG	東京, 気象庁
第4回エアロゾル科学・ 技術研究討論会	昭和61年8月21日~22日	エアロゾル研究協議会	愛知県産業貿易館 (名古屋市)
第3回アジア流体力学会議	昭和61年9月1日~5日	アジア流体力学会議委員会	日本都市センター
Beijing International Radiation Symposium	1986年9月2日~6日	Chinese Meteorological Society & American Meteorological Society	Beijing
昭和61年度日本気象学会 秋季大会	昭和61年11月5日~7日	日本気象学会	愛知厚生年金会館 (名古屋市)
International Union of Geodesy and Geophysics, XIX General Assembly	1987年8月9日~22日		カナダ, バンクーバー